

27AB-pm301

本学学修支援部門で展開している補講とその効果測定

○池野 聡¹, 井上 能博¹, 宇都宮 郁¹ (¹昭和薬大)

【目的】高校卒業時の学力低下や高校間の学力差が、初年度でのつまずきや上級学年での履修の障害になっている現実がある。私たちは、入学後なるべく早い時期に、学生間に見られる学力差を解消することが肝要であると考え、補講による学力の底上げを試みた。今回、1年生を対象にその効果を検証したので報告する。

【方法】高校卒業時の到達度を測る薬学ゼミナール作成のプレースメントテスト I および II (各 50 点満点) を用いた。補講対象者は、プレースメントテスト I の成績下位者とした。補講全日程終了後、補講受講者・非受講者ともにプレースメントテスト II を受験させ、受講群と非受講群で得点の伸びを比較した。検証には本学学修支援部門教員が補講を担当した生物および物理の結果を用いた。

【結果と考察】生物において、補講対象者の平均点が 18 点から 29 点へと 11 点上昇した。これに対し、非受講者の平均点は、34.7 点から 36.1 点へと 1.4 点上昇した。受講者の得点の伸びの方が大きく、その差は統計学的に有意なものであった。物理においても、補講対象者の平均点は 9.1 点から 13.3 点へと 4.2 点上昇したが、非受講者の平均点は 18 点から 19.4 点へと 1.4 点の上昇にとどまった。受講者の得点の伸びの方が大きく、その差は統計学的に有意なものであった。

以上より、今回行った補講は学生の学力の向上に効果があったことが明らかになった。本学で行われている通常講義と私たちが行った補講の方略の比較から、知識を使って問題を解く作業をさせる「アウトプット重視」や、概説-問題演習-解説と同じ項目を「短時間で繰り返す」ことが、学習効果の向上に重要な要素となったと推察された。